今日の紙芝居は「竜口の法難」という紙芝居です。

竜口の法難は文永8年9月12日、大聖人様が鎌倉の竜口で、頸を切られて殺されそうになった法難です。

事件の発端は大聖人様との祈雨の勝負に負けた極楽寺良観が、様々な画策をしたことに始まります。

大聖人様の御一生の中で大きな難が四回、小さな難は数え切れないほどありましたが、この法難は一番大きな難でありました。

それは、大聖人様がこの法難で、頸を切られようとした時に、それまでの凡夫としての姿を払って、久遠元初の御本仏様としての御姿を示された法難であるからです。

さあ、今からその法難についてお話しいたします。よく聞いて下さいね。

では始めます。

大聖人様は、政治の中心地であった鎌倉や、仏教の中心地ともいうべき比叡山をはじめ様々な寺院において仏法を学ばれ、その結果、建長五年四月二十八日、一人、清澄山の旭が森に立たれ「南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経」と唱えられ、末法万年の闇を開き、すべての人々が幸せになれるただ一つの教えを示されました。

さらに、その日のお昼には、

「この世の中の、苦しみを救う本当の教えはこの南無妙法蓮華経であります」

と力強くおおぜいの人々に向かって初めての説法をされました。

そして、当時の日本の中心であった鎌倉で正しい教えを、弘めることにしたのであります。

鎌倉に入られた大聖人様は、この地図の右下の方にある、松葉ヶ谷に小さな庵室を建てて、そこを中心として、折伏弘教に励まれました。

松葉ヶ谷は、現在の神奈川県鎌倉市の鎌倉駅の南西約１kmの辺りにありました。

そのころの鎌倉では、禅宗を強く信じる北条時頼が幕府の執権になっていたため、国のお金で建てた禅宗の寺が多く、その他のいろいろな宗派も競って大きなお寺を建てていました。

大聖人様はその中へ自ら飛び込んで、民衆のために、松葉ヶ谷に小さな草庵を建てたのであります。

現在鎌倉には、扇ガ谷というところに、日蓮正宗の寺院「護国寺」が建立されております。

大聖人様は鎌倉の町なかで、南無妙法蓮華経と書いた旗を立てて、命がけの説法を始めました。

「あの旗に、なんて書いてあるんだ？」

「なん・みょう・ほう・れん・げ・きょう、って書いてあるそうだ」

大聖人様は、南無妙法蓮華経を初めて聞く人々に、確信に満ちた声で、

「間違った宗教を信じてはいけません。これからは南無妙法蓮華経と唱えなさい。これだけが人々を幸せにする道なのです」

「間違った宗教とは何のことだ」

「念仏は地獄の教え、禅宗は天魔の教え、法華経の南無妙法蓮華経以外は、全部間違った教えです」

「なにぃ？この坊主をやっつけろ」

「引っ込め！」

民衆は怒り出し、石を投げたり大声で大聖人様を罵ったりしました。

それでも大聖人様は、南無妙法蓮華経の説法を命がけで続けました。

しかし、三年もたつころ、大聖人様の説法に真剣に耳を傾け、信者となる人々も徐々に増えてきました。

四条金吾・工藤吉隆・池上兄弟等の人々が入信したのはこの頃のことでありました。

大聖人様が、南無妙法蓮華経を信じなければ、飢饉や疫病の外に、もっと災難が起こると言ったとおり、大地震が起こりました。

街中に死人や病人があふれて、ちょうど生き地獄のような状態で、人々は苦しみにあえいでおりました。

これらの有様をご覧になった大聖人様は、当時の鎌倉幕府に対して、今こそ人々を救うために、正しい教えを説いて訴えようと、お考えになりました。

そして、正しい南無妙法蓮華経の教えによらなければ、真実の幸せなないこと、さらに、もしも、このまま正しい教えを信じなければ、必ず仲間同士の争いごとや、外国の軍が攻め込んでくることを、様々な経文の証拠を挙げて、有名な立正安国論を書かれ、文応元年7月16日、時の執権である北条時頼に提出したのであります。

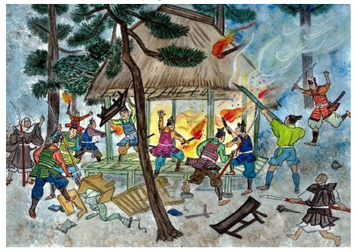
立正安国論には、

「現在、日本国中に起こっている疫病(えきびょう)や飢饉(ききん)などは、法華経を信じないためである。南無妙法蓮華経の教えを日本中の人々が信じ、人々が一同に御題目(おだいもく)を唱えるならば、国土は安(あん)穏(のん)となり、必ず本当の幸せになることが出来るのである。故に、日本国の中心者である人こそ、早くそれらの間違った教えを捨てて、正しい南無妙法蓮華経の教えを信じなさい」と書かれてあり、この安国論で幕府の指導者を諫(いさ)めたのであります。しかし、北条時頼は、

「日蓮め、飢饉や大地震を宗教のせいにして、外国が攻めて来るというのか！そんなこと信じられるものか！」

と怒(いか)り狂いました。

竜口の法難　１９分の



痛烈に破折された念仏の者どもは、大聖人様を殺してしまおうと、松葉ヶ谷の草庵を焼き打ちにするために火を放ちました。

「日蓮はどこだ」

「こんな建物、燃やしてしまえ」

「日蓮を殺してしまえ」

しかし、法華経を弘める人は、必ず難を受けていくことが経文に書かれていますので、大聖人様は御自分が法華経の行者であるとの確信を益々強くされたのでありました。

この焼き打ちの難を、逃れられた大聖人様は、翌年には再び鎌倉に戻られ、前にも増して強く、

「念仏宗や禅宗などでは幸せになれない。苦しみが増していくだけである。南無妙法蓮華経を信じなさい」

と声を大にして叫ばれました。

その後、大聖人様の身の上に、伊豆流罪・小松原の法難など、命に及ぶほどの法難が次々と起こったのであります。

８年後の文永（ぶんねい）５年のことです。蒙古（もうこ）という国から「言う事を聞かないと攻め込むぞ」という手紙が届きました。

大聖人様が立正安国論の中で「外国が攻めてくる」と予言されていた通りになったのです。

大聖人様は再び、幕府を始め、建長寺（けんちょうじ）、寿福寺（じゅふくじ）、極楽寺（ごくらくじ）等の大寺院十一カ所に対して、文書をもって、

「今こそ、邪法（じゃほう）邪義（じゃぎ）を無くし、正法正義（しょうぼうしょうぎ）を人々一同が信心しなければ、必ず国は亡ぶであろう」

としたためて、力強く訴えられました。

いわゆるこれが、十一通御書と呼ばれるものであります。

しかし、幕府の首脳（しゅのう）たちはまったく耳を傾けなかったのです。

その3年後、全国的に雨がまったく降らず、作物も収穫できなくなり、幕府は、極楽寺良観に「雨が降るように」雨乞いの祈祷を命じました。

このことを聞かれた大聖人様は、ちょうどいい機会であると、良観に対して、

「もし七日以内に雨が降れば日蓮はあなたの弟子になろう。降らなければ、あなたは法華経に帰依しなさい」

と約束をさせました。

良観は弟子たちと、一心不乱に祈りましたが、七日はおろか、さらに願い出た七日間の延長期限にも一滴の雨も降らすことがでず、それどころか以前よりも干ばつはひどくなりました。

そこで大聖人様が祈ると、たちまち雨が降り始めました。

この勝負、大聖人様の勝ちは明かでありました。

そのころ極楽寺（ごくらくじ）では

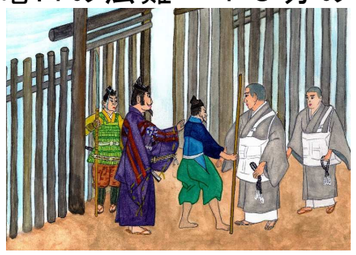
「良観殿、日蓮のせいで信者が少なくなりもうしたな・・・・・」

「そうなんじゃ。日蓮めくだらんことばっかりいいおって・・・・」

「このままにはしておかぬぞ。なにかいい方法を考えねば・・・・」

と、良観は約束を守るどころか、仲間（なかま）の坊さんや役人たちと、大聖人様をやっつける方法を考えていました。

そして、役人やその女房たちに、大聖人様に対する様々なでたらめなことばかりを言いふらし、とうとう、不当（ふとう）な訴（うった）えを幕府に起こしたのであります。



それによって文永8年9月10日、今の裁判所である評定所へ呼ばれ、平左衛門尉の取り調べを受けることになりました。

この時大聖人様は、

「仏の使であるこの日蓮を迫害するならば、必ず罰の姿として、先に言ってある蒙古の攻撃や、仲間内の争いごとが必ず起こるであろう」

と、堂々と言い切られて、幕府に対していさめられたのでありました。

この取り調べでは一旦、何のおとがめもなく終わりましたが、大聖人様はこれより二日後の9月12日、立正安国論を再び添えて、平左衛門尉に宛てて手紙を書き、正法を一刻も早く信じるようにうったえました。

これに対して平左衛門尉は、ますます憎しみの命を強め、その日のうちに、松葉ヶ谷の草庵に

「日蓮を捕まえろ！」

とおおぜいの兵士を連れてやってきました。

その怒り狂った姿を見て、大聖人様は

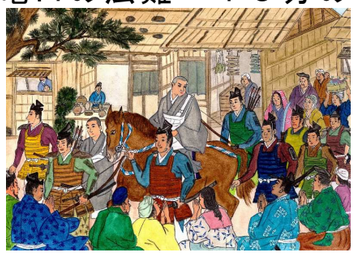
「何とこっけいなことか。平左衛門尉が物に狂った姿を見よ。日蓮は日本の柱ですぞ。その柱を倒すつもりか？」

と厳しく叱りつけました。

この兵士の中にいた少輔房という者は、法華経の巻物で大聖人様の頭を三回も叩きつけました。その時大聖人様は、

「この法華経の第五の巻には、末法に法華経を弘通する者は刀杖の難に遭うと説かれている。このことで法華経を身で読んでいることになる。なんとありがたいことか」

と、この大難をむしろお喜びになられたのであります。



大聖人様は結局、捕われの身となって、松葉ヶ谷の草庵から鎌倉の街中を重罪人のように引き回され、その有り様はまるで逆賊あつかいのような状態でした。

ところが役人たちの扱いとは違い、大聖人様の気迫のこもった辻説法を聞いていた人々の中に、少しずつ南無妙法蓮華経の教えを信じる者も出てきておりました。

大聖人様が評定所へ連行される道中、手を合わせ「どうかご無事でありますように」と、祈る人々もおりましたが、評定所へ連行された大聖人様は、その日の夜半、一切の取り調べもなく、平左衛門尉より「佐渡流罪」をいい渡されたのでした。

しかし、これは表向きのことで、実際には大聖人様を亡き者にしてしまおうと計画が立てられていました。

大聖人様は裸馬に乗せられ竜口へと連行されることになりました。

竜口は当時罪人を打ち首にする処刑場でありました。つまり、人知れずひそかに大聖人様の頸を切ってしまおうとしたのです。

大聖人様を連行する一行が、鶴岡八幡宮の前にさしかかったとき、大聖人様は馬から下りられ大きな声で、

「八幡大菩薩よ！汝は法華経の行者を守るべく固く誓いを立てているにもかかわらず、今日蓮がこのように死罪に赴かんとするに、いまだ何の守護もない。一体どうしたことか。八幡大菩薩が真実の神であるならば、いそぎいそぎ、その誓いを守り給え」

と、八幡大菩薩を諫められました。

大聖人様の叱責に街道で見守る人々や信者達は、手を合わせて、御題目を唱えておりました。

伝説によりますと、大聖人様が竜口の刑場へ向かう時、一人の老婆がぼた餅を差し出されました。

「お聖人様、おいたわしゅうございます。これはこの婆が、只今こしらえたぼた餅でございます。どうか召し上がって下さいませ」

大聖人様はこの老婆の真心のぼた餅供養を大変ありがたく思い、ぼた餅を差し出す老婆を優しく見つめられながら、

「真実の法華経の行者であるこの日蓮に、ぼた餅を供養する功徳ははかりしれないものがありましょう。このありがたい真心、たしかにお受けしました。しかしおばば殿、その志は帰りに頂きましょう」

と、必ず生きて帰られることを約束されました。そして、この老婆は、この力強い確信に充ちたお言葉に目をうるませながら、一心に御題目を唱えて、刑場へ引かれていく後姿をお見送り申し上げたと伝えられております。

大聖人様の一行は更に歩みを進め、由比ヶ浜をすぎたあたりで、大聖人様は使いをつかわして四条金吾に事の次第を知らせました。

大聖人様の一大事を聞いた四条金吾は、夜中にもかかわらずしかも素足のまま、ただちに大聖人様のもとへ駆けつけました。

そして、馬のくつわにとりすがって

「大聖人様が頸を切られるならば、金吾も必ずお供をいたします」

と涙を流しながら、馬上の大聖人様に叫ばれました。

大聖人様は、この四条金吾の姿を見つめられ、

「何を悲しんでおるのだ。今日蓮は、この頸を法華経の為に捧げようとしているのです。この功徳は計り知れない程大きいのです」

この大聖人の尊い姿に、四条金吾は深く感動し、涙をふき払って、ただ一心に御題目を唱え続けて、大聖人様のお供をして竜口へと向かっていきました。

竜の口の刑場では大聖人様の身を案じて弟子や信徒達が大勢集まっておりました。更に念仏の者達や役人、警備の侍達が見守る中、やがて大聖人様の一行が到着しました。

大聖人様は頸の座につき、ゆうゆうと御題目を唱え出されました。

「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経・・・・・」

集まって来た弟子や信徒達も一斉に声を合わせて、唱和する声が竜口の刑場の夜空に響き渡っておりました。

「御覚悟を・・・・・」

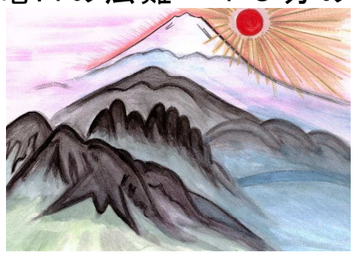
太刀取りが大聖人様に刑の執行を告げ、

（ゆっくりめくりながら）

刀を大きく振り上げ、大聖人様の頸をめがけて振り下ろそうとした、

その瞬間！

パァーッと、
空にまぶしい光り物が飛びました。
「あっ、目が見えない・・・・」
首切り役人は、その強烈な光りに目がくらんで、倒れ伏しました。
また、周りに取り囲んでいたたくさんの兵士たちも、恐怖におののいて逃げ出してしまいました。
首切り役人は、恐れのあまり再び刀を振り上げることはできませんでした。
結局、大聖人様のお命を断つことはできませんでした。



この時、大聖人様は世界中の人々を救う本当の仏様、御本仏であることが明らかになったのであります。

このことについて大聖人様は

「日蓮といいし者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ、此れは魂魄佐渡の国にいたりて云々」

と申され、凡夫としての生命から真の仏様の生命に変わったと明かされています。

大聖人様はこの竜口の法難という身命に及ぶ大法難の中で、久遠の御本仏としての御姿を示されたのであります。

またこの法難は、偶然起こったものではありません。大聖人様の法華経を体で読んだ、経文通りの御姿、御本仏の御振舞であります。

私たちは、この御本仏日蓮大聖人様への御報恩感謝の気もちをぜったいに忘れずに、毎日信心に励んでいくことが大事なのです。

以上で終わります。